

卒業生からの寄稿

薬学生から病院薬剤師へ

2013年度卒業 伊佐治 薫

薬学部設置10周年を迎えるということで、まずは心よりお喜び申し上げます。祖父が薬剤師だったから、親戚一同が医療に携わっていたから、という理由だけで進学してしまった私にとって、想像していた大学生活とは似ても似つかない薬学部の生活に慣れることは容易ではありませんでした。

入学当初は、自分がどんな薬剤師になりたいのか、卒業後はどうするのかといったことも明確に決まっていませんでしたから、ただただ目の前の定期試験のためだけに勉強をしていました。そんな私のターニングポイントとなったのが、薬物動態学の授業です。薬物がどのように血中やその他組織へと移行するのかということや、様々な病態で血中濃度がどう変動するのか等を学んでいくうちに、臨床との結びつきを意識するようになりました。中でも、妊婦での体内動態や、乳汁中への薬物移行について興味を持ち、長期実務実習の際に妊婦・授乳婦専門薬剤師制度を知ったことが、いずれは資格を取得したいという目標をもつことに繋がりました。

現在、私は、長野県の病院に勤めています。妊婦・授乳婦薬物療法認定薬剤師資格を取得された方がいらっしゃる、資格取得のための環境も整っています。今年の5月には、日本病院薬剤師会主催の妊婦・授乳婦薬物療法認定薬剤師講習会へと同行させていただき、専門薬剤師の先生方や小児科・産婦人科の先生より、妊婦・授乳婦の薬物療法における最新の研究結果を拝聴することができました。

今後は、薬物療法について学ぶことはもちろん、産科病棟への具体的な介入方法についても考えていきたいと思っております。最後になりましたが、在学中にお世話になりました諸先生方に感謝を申し上げますとともに、愛知学院大学薬学部のさらなるご発展を祈念いたします。

